

新しい年のはじめ、多くの人が、この年にやりたいこと、やるべきことについて展望し、想像をめぐらしているに違いない。とはいえ、新年になったからといって、人の想像力が自動的に活性化し、今まで思いもつかなかった発想が飛び出すわけではない。では、想像力をかき立てる源泉はどこにあるのだろうか。

私の場合、それは読書の中にある。読むという行為の他にも、絵画や建築物を見たり、人と話す中で新たな発想を得ることはあるだろう。しかし、同じ対象物に向き合っていたとしても、それを自分の世界観の中に位置づける知識や思索があるかどうかによって、見え方はまったく異なってくる。読書は、世界をより繊細

小原 克博氏

435



こはら・かつひろ 大阪生まれ。同志社大学院神学研究科修了、博士(神学)。現在、同大神学部教授、一神教学際研究センター長。専門は宗教倫理。著書に『宗教のポリティクス』など。

により広く見る力を与えてくれる。

世界の起源や意味に、人類は有史以来関心を持ち、見える世界や見えない世界と関わる作法や儀礼、そして神話のような物語をつくり出してきた。それらは広い意味での宗教の起源であり、また「テキスト世界」とも言える伝承の源泉である。それが口伝されたか、粘土板やパピルスに記されていたかにかかわらず、テキスト世界は世代を超えて伝承さ

れ、温故知新のことわざのごとく、新しい時代と環境に適応するための知恵の供給源であった。

今、電子書籍の時代を迎え、私の読書経験もこの5年ほどの間に激変した。口伝、羊皮紙、パピルス、そしてグーテンベルクによる活版印刷術によって何千年という時を経て伝えられてきた聖書テキストが、今や、スマートフォンアプリとなり、指先一つで操作できるようにな

っている。膨大なページ数の本を何冊も、小さな機器に収めて持ち歩くことのできる快感は21世紀特有のものだ。

この1、2年の間にやはり大きく変化した光景がある。電車を待っていたり、乗り込んだ後、圧倒的多数の人々が小さな電子機器の画面をのぞき込み、時に懸命に指先を動かしている。これは現代におけるテキスト世界の吸引力であろう。もはや若者にとどまらないこの変化を見ながら、私がふと思うのは、このテキスト経験は人の想像力を活性化し、新たな知恵の入り口になっているのだろうか、ということである。かつてないほどの吸引力をもったテキスト世界が、人を情報の世界に閉じ込める魔法になっているとすれば、恐ろしいことである。情報操作の快感と万能感ではなく、世界と関わる想像力への飢餓感を持つことが年始めにはふさわしいのかもしれない。

(同志社大教授)

想像力培ひ「読む」行為